

高尾山山頂から発信！

のぶすま

「のぶすま」とは
ムササビの古い呼び名です。

vol.57 季刊
2019年秋号



高尾山に暮らす哺乳類

高尾山には、32種の哺乳類が生息していることが確認されています。その中には、タヌキやアナグマなどの里山に生息する動物から、もっと高い山に生息するイメージの強い、ヤマネやモモンガなども含まれます。また、大型のシカやカモシカ、クマなども確認されるなど、実に幅広い哺乳類たちが暮らしています。

出会ったことのある動物はいるかな？

高尾山の哺乳類(32種※外来ネズミ3種は除く) 1947年～2019年までに確認されている種
ニホンジネズミ、カワネズミ、ヒメズ、アズマモグラ、キクガシラコウモリ、アブラコウモリ、ヒナコウモリ、コテンゴウモリ、ヤマコウモリ、モモジロコウモリ、ニホンザル、ニホンウサギ、ニホンリス、ムササビ、ニホンモモンガ、ヤマネ、ハタネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ、スミスネズミ、ツキノワグマ、タヌキ、アカギツネ、ニホンテン、ニホンイタチ、ニホンアナグマ、ハクビシン、アライグマ、イノシシ、ニホンジカ、ニホンカモシカ
参考文献:八王子自然友の会1985年6月「多摩の自然(第82号)」、八王子市市史編集専門部自然部会「新八王子市史自然調査報告書 八王子市動植物目録(2016年)」

Twitterでふりかえる 高尾山ニュース!

2018年の4月より、Twitter・Facebookをはじめました！
山頂の気温や天気、旬な自然情報などを毎日発信しています。
では、7月～10月の間のツイートから、注目のニュースをご紹介します。

ウラギンシジミの幼虫に夢中 (2019/8/30)



クズの花の美しい紫のグラデーションを見事に真似たウラギンシジミの幼虫。毎年この季節になると、この子を探しに山頂周辺のクズの花を訪ね歩きます。見つけるたび、その愛らしさに心臓がズキューンとなります。また来年も会えますように。

解説員 こらむ vol.19 オオトラ・チャレンジ

五千種もの昆虫が生息すると言われていた高尾山。季節が進むにつれ、見られる昆虫は日々少しずつ入れ替わり、一、二ヶ月もすると大きく変化する。都心からのアクセスが良いこともあり、一年を通じて様々な目的を持った虫好きが来山する。
そんな昆虫愛好家たちが待ち侘びる人気昆虫のシーズンがある。例えば、春はイボタガ、初夏はフジミドリシジミで、首を長くしてこの時期を待つ虫好きは多い。そして、初秋は、オオトラカミキリ(以下、オオトラ)のシーズンである。
オオトラは生きたモミの木につく二～三センチ程のカミキリムシである。黄色と黒の縞模様、くびれがあるフォルムをしており、その姿はハチを彷彿とさせる。珍しい虫で、見つけるのが難しい。私は数か所で十年ぐらい探しているが、見つけられたのは秩父で一頭だけである。オオトラを見つめるための条件はいくつかあるが、条件を満たしたところで、運と機会に恵まれていないと見つけられないだろう。
二年前からここ高尾山で働くことになり、運と機会に恵まれなかった私にもついに機会の方が巡ってきた、などと宣(のたま)うと怒られそうだが、正直期待はした。夏が終わりに近づくとモミを凝視しながら通勤する日々が続いた。
しかしある日、まぼと虫は関心がなく他のスタッフが、通勤時に地に落ちた特大のオオトラを見つけてしまった。そろそろ寿命だったのか、脚の力が弱まり木から落ちてきたのだろう。私は未だに高尾山で見つけられないのに、何たることか。ここに来て機会には恵まれたが、相変わらず運の方はなままであった。今年こそは高尾山で見つけてやる。熱い思いを抱き、今日も通勤するのであった。

〈解説員 こばやし〉

FUN FUN! たかおさん

「悲しいフィールドサイン」の巻



作:むらかみ/絵:うめだ

「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて準備しております。
ご希望の方はビジターセンター窓口までお越し下さい。



高尾周辺に残る戦争の爪痕

国内外に多くの犠牲を払った太平洋戦争、高尾も例外ではありません。現在でも数々の爪痕が残されています。終戦間近の高尾周辺はどんな状況だったのでしょうか。

高尾駅に降りた時、同行していた父が「ここを知っている」と、幼少期の体験を教えてくださいました。私は初めて聞く父の高尾山と戦争の話に驚きました。

1944年11月、戦況は悪化の一途をたどり本土空襲が始まりました。武蔵野町(現在の武蔵野市)にあった東洋最大の飛行機エンジン製造工場「中島飛行機武蔵野製作所」も空襲を受け、作業をしていた多くの人命が失われました。これを機に製作所は疎開を決定します。疎開先は本土決戦に備え武器や軍需品の備蓄のために浅川駅(現在の高尾駅)近くに建設されていた、総延長約10kmの巨大な「浅川地下壕」でした。

製作所は1945年7月から稼働を始めましたが、山中にあった地下壕は製造した部品が翌日には錆が浮く程の湿気があり、壕内と外気との激しい温度差で作業員が下痢を起こす過酷な環境でした。当時、光生(こうせい)中学校の生徒だった父は、家のある新宿駅から中央線を使って浅川駅まで毎日通っていました。当時13歳の父は製造には携わず、地下壕入口に落枝を集め、工場入口を隠す作業をしました。都会の子供たちにとって、初めて自分で作ったわらじを履いて行う山での作業は遊び感覚でしたが、製作所はいつ攻撃を受けるか分からない死と隣り合わせの場所、空襲の時はとても怖かったそうです。

同年8月5日、浅川駅と相模湖駅の間にある

湯の花トンネル付近で、機銃掃射による空襲がありました。8月2日の八王子大空襲から全面復旧したばかりの山梨方面へ向かう列車を追うように、P51戦闘機が高尾山上空から近づいてきました。攻撃を受けた車両は、トンネルに機関車と客車1両半入った時点で停車しました。車内に残され逃げ場が無くなった民間人の乗客は、さらに狙い撃ちされてしまいました。付近で作業をしていた父の友人が数名現場に駆けつけ、悲惨な状況の中で負傷者を担架に乗せ、病院まで運ぶ手伝いをしてさうです。湯の花トンネルの空襲から9日後、日本はポツダム宣言を受諾し、翌日終戦を迎えました。

現在、トンネル付近には亡くなられた方の名を記した慰霊碑があり、高尾駅には機銃掃射を受けた柱が残され、銃弾痕を見ることが出来ます。浅川地下壕も太平洋戦争の負の遺産として残されています。戦後日本は平和な時代になり、父は山や自然が大好きな青年に成長し、そして今は大好きな山に登ることのできない年齢になりました。戦争を体験した世代が少なくなるなか、後世へ戦争の悲惨さ、平和の大切さを語り継ぐ大切さを感じました。現在は多くの方でにぎわう高尾山周辺にも戦争の爪痕があることを知り、驚くとともに山や自然を楽しめる平和な時代に感謝しました。

出典：浅川地下壕の保存をすすめる会「フィールドワーク 浅川地下壕」学び・調べ・考えよう『平和文化』2005年

〈解説員 さとう(た)〉

哺乳類たちの暮らしを支える 高尾山の豊かな自然

都心から電車で1時間、関東山地の東端に位置する標高599mの高尾山。都市化や大きな開発を免れ、スギ・ヒノキなどの人工林だけでなく、今なお多くの自然林が残っています。さらに南斜面と北斜面下部には暖温帯系の常緑広葉樹林、北斜面上部には冷温帯系の落葉広葉樹林が広がり、この多様な植生が多くの動物たちの食べものや、すみかや隠れ場となり、彼らの暮らしを支えています。

動物たちがいる証拠

野生動物たちは警戒心が強く、またその多くは夜行性のため、普段なかなか出会うことはできません。しかし、動物たちのフンや足跡などの痕跡(フィールドサイン)を見つけることで、彼らの存在を感じることができます。

～高尾山でよく見かけるフィールドサイン3選～

ムササビの食べあと



ムササビは主に植物を食べ暮らしています。登山道に食べかけの葉や、木の実などが落ちていたら彼らの食べあとかも。



テンのフン



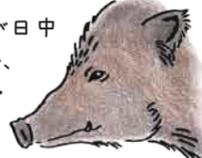
テンは目立つ場所にフンをする習性があるため、よく目につきます。石や、切り株、時にはベンチの上などでも見かけることがあります!



イノシシの堀りあと



登山道脇などで、畑を耕したようなイノシシの堀あとをよく見かけます。からだの大きな彼らが日中、どこに隠れているのか、本当に不思議です...

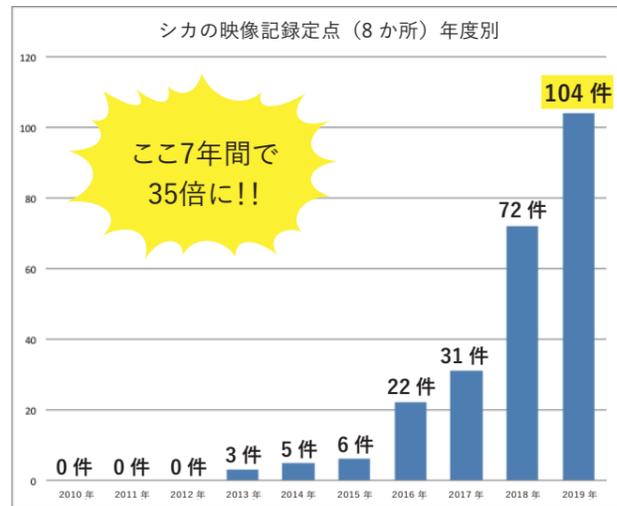


高尾山に迫り来る、シカの食害問題

日本に昔から生息しているニホンジカですが、近年急速に生息数が増加し分布を広げ、食害による生態系への影響が問題となっています。高尾山でも、これまでほとんど確認されていなかったシカが、2013年からセンサーカメラなどに映り出し、現在に至るまでにもすごいスピードで記録件数が増加しています。山内ではすでに食痕なども目につく始めており、このままシカが増え続ければ、高尾山の下層植生が食べられ、生態系のバランスが崩れることが懸念されます。



一高尾山で見つかったシカの食痕(植物：ノブキ)
高尾山～景信山(小沢沢国有林)周辺定点8か所に設置されたセンサーカメラ(2019年8月までの記録)→情報・データ提供:「高尾森づくりの会」



さいごに

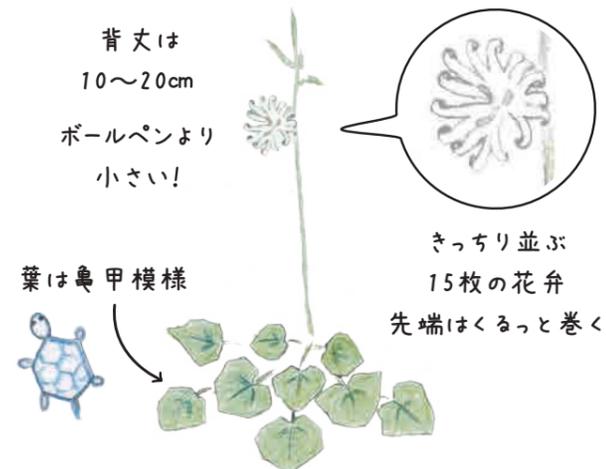
私はこれまで、毎日の山頂までの通勤の合間などでたくさんの野生動物たちとの出会いがありました。これまでに出会ったり、痕跡を確認した哺乳類は19種。その全てが私の記憶に強く焼きついています。周辺の山と比べても、哺乳類の生息数が多い高尾山。改めて、彼らの暮らしを支えられるだけのこの山の懐の深さに感銘を受けます。しかし、現在シカの増加による食害問題など、人と野生動物たちの暮らしのバランスが崩れて来ているのもまた事実です。日々変化する状況を今まで以上に敏感に捉え、野生動物たちとの距離についてしっかりと向き合い、行動していかなければなりません。

〈解説員 うめだ〉

〈解説員 もちづき〉

観察適期...10月中旬～下旬
見られる場所...3・4号路、稲荷山

風車のような花、亀甲文様の葉。デザイン性高いその姿に出会うといつも「ハッ」とします。登山道脇にさりげなく咲いています。



背丈は10～20cm
ボールペンより小さい!

葉は亀甲模様

きっちり並ぶ15枚の花弁
先端はくると巻く

完成されたデザイン!



解説員の